ワークショップの効用と活かし方

An Effective Use of a Workshop

杉本　康希 Kouki Sugimoto

はじめに

今や，「ワークショップ」は社会のさまざまな分野で行われていますが，今回はその基本的な特徴，効用，活用法などを学び，バハイにおける「協議」との共通性を活かして，社会との関わりの現場での活用の可能性を探りました。なお，大会２日目の「ワークショップ体験」は，本発表をベースに実施されました。

ワークショップの特徴

「ワークショップ」は，その特徴を他と比較し一言でまとめて，新しいタイプの「参加･体験･相互作用型学習法」と呼ぶことができます。

1. 参加型････自ら主体的に意欲を以って参加し，メンバーの一員として主役となるので，教える側，教えられる側という関係は存在しません。
2. 体験型････言葉だけの理解ではなく，身体を使ってやってみたり，心で感じたりと心身を総動員しての体験を重視します。これは「頭」，「体」，「心」全ての能力を必要に応じて総動員するホリスティック(全体包括的)な学びの方法とも言えます。
3. 相互作用型･･複数の参加者がグループとなって相互の多様性を通して刺激し合い，分かち合いを大切にします。

ワークショップの種類

ワークショップの内容から見て，「受動的か能動的か」と「内向きか外向きか」により分類すると，大まかに，4タイプに種類分けされています。ただし，通常ワークショップは種類に合わせるのではなく，先に何らかの必要があって開かれるわけですから，種類分けは参考のためのものです。

1. 受動的･･･学習的　(教育)
2. 能動的･･･芸術的　(演劇，音楽，絵画)
3. 内向き･･･個人的　(自己変革，自己成長)
4. 外向き･･･社会的　(社会変革)

現実の社会での課題は多岐にわたり，そのうえ相互に複雑に絡み合っているので，ワークショップにも多様な対応が求められています。そこで，別の分類では，①アート系，②町づくり系，③社会改革系，④自然･環境系，⑤教育･学習系，⑥精神世界系，の6タイプに分類した上で，精

神世界系と社会改革系を融合して⑦統合系とする試みを中野(2001)はしています。注目したいのは統合系で，個人としての内面への探求を「精神世界」，社会への取組みを「社会改革」と称していますが，この2つが統合されるテーマのワークショップは ABS の役割の一つでもある，社会との関わりを推進する活動に大いに活用できると思います。

ワークショップ参加者の役割

ワークショップの参加者は，グループの中では先生と生徒のような関係ではなく，対等な関係の参加者として，主人公として相互作用の中で学びあいの場を構成する要員ということになります。ワークショップは「参加」，「体験」，「相互作用」が特徴なので，ワークショップを実りあるものにするためには，参加する全メンバーがこの 3 つの特徴を踏まえて，共通の心得をもつことが不可欠です。以下，幾つかの心構えを挙げておきます。

＜1＞自由に発言をする ‥参加者は全員が共通の目的のもとに集まったメンバーであり，聴く心得を持った仲間であるから安心して話すことができるはずです。

＊遠慮せずに発言する
＊気取らず謙虚に発言する
＊正直に発言する
＊素直に発言する。

＜2＞ 話を深く聴く‥聞くではなく「聴く」に注目して下さい。

「聴」という文字を分解すると，耳，目，心，の 3 文字がかけ合わされていることがわかります。聴くとは，耳で話を，目で表情を，心で感情まで汲み取るホリスティックな人間理解を示しているわけです。またこのような傾聴の原則である，ひたすら共感をもって聴くためには，テクニックと併せて，その心の根底に参加者が相互に，信頼しあい，多様性を認めあい，尊敬しあうという人間愛が前提となっていなくてはなりません。

＊ひたすら受容して聴く
＊ひたすら共感をもって聴く
＊評価しないで聴く
＊批判しないで聴く
＊教えようとしないで聴く
＊誉めようとしないで聴く

＜3＞ 共通の場を大切にする‥ワークショップ参加者でつくる場は，参加者全員のものなので，そこでの発言や行動はメンバーの共有資産と見ることができます。

＊多様さを認めあう
＊刺激しあう

＊啓発しあう
＊新しい価値を創造しあう

ファシリテーターの役割

ワークショップでは，プログラムを推進していく重要な役を担う人を「ファシリテーター」と呼んでいます。「ファシリテート(= facilitate)」とは，英和辞典によると「促進する，助成する，手助けをする」と訳されていますが，ワークショップにおけるファシリテーターに求められる役割は多岐にわたるので，詳しく見ておきます。なお，ファシリテーターを適切に表現する日本語が無いので英語をそのまま使うことにします。

ファシリテーターは従来型の教育における「先生」とか単なる進行役としての「司会者」とは本質的に異なる役割を担っていますので，「進行促進触媒」とも喩えられます。

1. 参加者お互いの円滑なコミュニケーションを促進する。･･･環境整備
2. 参加者の知識や経験，意欲などを引き出し促進する。･･･動機付け
3. 学びや創造活動をはじめ問題解決を促進する。･･･創造･実践

ファシリテーターに必要な幾つかの素質をあげておきます。
「親しみ易さ」，「解放性」，「柔軟性」，「素直性」，「受容力」，「表現力」「信頼感」

＜名前＞	＜関係＞	＜主な役割＞
従来型の先生	上下	教育
司会	中心	進行
コーチ	中下	指導
ファシリテーター	水平	促進

ワークショップと他の学習法との関わり

集団勉強法としては，ブレイン･ストーミング，パネル･ディスカション，KJ 法，論議，討議などの色々な方法が挙げられますが，それぞれある種の限定的目的を持っています。ワークショップとの関わりとしては，ワークショップの進行のある段階で部分的に活かして使うことは想定できますが，ケース･バイ･ケースとなるでしょう。バハイの「協議」との関わりは，これらとは本質的に異なります。ワークショップはバハイの「協議」の理念を，その理念を知らない人びとにも抵抗なく自然に受け止めてもらうためにも社会との関わりの中で大いに活用出来るでしょう。

ワークショップ体験の報告

大会2日目，9月26日に参加者全員で実施したワークショップ体験の概要を簡単に報告いたします。

＊テーマ･･･“美徳の受け止め方”
＊資料････1 本の樹に 52 の美徳の文字をレイアウトしたコピー紙

1. 自己紹介･･･なりたい自分に成った名刺(A4 サイズ)を作り，メンバーに楽しく自己紹介して，和やかな雰囲気になった。
2. 美徳選び(1)･･･52 の美徳の中から自分が一番大切だと思う美徳を選んで，その理由を一人ひとり説明してもらった。
3. 美徳選び(2)･･･一番大切だと選んだ美徳と関連する美徳を選んで，その理由を説明してもらった。

ワークショップでは，美徳選びを 52 回繰り返し，選んだ美徳と美徳を順に線で結んで最終的にどのような美徳図になるかに期待を寄せていました。時間が足りなかったので，残念ながら4～5回で切り上げとなった。

ワークショップ体験で期待した学び

1. 美徳の選び方や理由が人によりそれぞれ異なるという多様性に触れること。
2. 多様な受け止め方の中でも，美徳の大切さは全く同じであること。
3. 同じ学びのテーマでも，ワークショップで学ぶとメンバーの相互作用で学びが深まること
4. 楽しみながら学べること。

参考文献

中野民夫 (2001)『ワークショップ－新しい学びと創造の場』岩波新書

諸富祥彦『トランスパーソナル心理学入門』講談社現代新書

水島広子『怖れを手放す－アティテュ－ディナル･ヒーリング入門ワークショップ』清和書房

ＮＰＯ法人ホールファミリーケア協会･第２０期傾聴ボランティア養成講座『講義録』